

上野尼御前御返事

法華經と申すは手に取れば其の手やがて仏に成り、口に唱ふれば其の口即ち仏なり。譬へば天月の東の山の端（は）に出づれば、其の時即ち水に影の浮かぶが如く、音とひびきとの同時なるが如し。故に經に云はく「若し法を聞くこと有らん者は一（ひとり）として成仏せずといふこと無けん」云々。文の心は此の經を持つ人は百人は百人ながら、千人は千人ながら、一人もかけず仏に成ると申す文なり。
(御書 1574 頁)

【通釈】

法華經は、手に取れば、その手が直ちに仏に成り、口に唱えれば、その口がそのまま仏と成る。例えば、天の月が東の山の端に出れば、その時直ちに水面にその影が浮かぶように、また音と響きとが同時であるようなものである。ゆえに法華經方便品には「もし法（法華經）を聞くことができた者は、一人として成仏しない者はない」とある。文の心は、この經を持つ人は、百人なら百人が、千人なら千人が、一人も欠けずに仏に成るという文である。

【主な語句の解説】

・「若し法を聞くこと有らん者は一（ひとり）として成仏せずといふこと無けん」
→法華經方便品の「若有聞法者 無一不成仏」（法華經 1 1 8）の文を訓読したもの。法華經を聞くことができた者は、すべて成仏するとの意。

【背景と大意】

本抄は、本門戒壇の大御本尊を御図頭された翌年、弘安三（一二八〇）年十一月十五日、日蓮大聖人五十九歳の御時に身延において認められ、南条時光殿の母尼御前に与えられたお手紙です。

大聖人はまず、尼御前に対し、法華經が花と菓（み）が同時である蓮華に譬えられることを挙げて、法華經を信じる者は必ず即身成仏することを明かされています。また尼御前が、亡父松野六郎左衛門入道の忌日に御供養されたことに因み、『法華伝記』の「烏竜（おりょう）・遺竜（いりょう）」の故事を引用され、父子は一体であり、子の善根が亡き親への果報として現れることを示され、松野入道殿の成仏は疑いないことを述べられています。そして日興上人に、この手紙の内容を詳しく読み聞かせるように指示をされ、この手紙を結ばれています。

【法話のポイント】

○法華經の功德は即身成仏

大聖人は拝読御文の前段において、植物は通常、花が咲く前、または咲いた後に実が生（な）るが、蓮華には原因としての花が咲く時すでに結果としての実（果）が具わっているという特性があることを示され、法華經の「原因と結果が同時に具わる」という深い意義を説かれています。次いで、拝読の「法華經と申すは手に取れば其の手やがて仏に成り、口に唱ふれば其の口即ち仏なり」と仰せられ、即身成仏という法華經の厳然たる功德を示されています。

もちろん末法の私達は、御本尊を信受し、因果俱時・不思議の一法である南無妙法蓮華經の題目を唱えることによって、華果同時の蓮華のごとく、煩惱を持った凡夫の身、そのまま即身成仏という最高の境界に至ることができるのです。

○父子一体の成仏

大聖人は「書の達人であった父烏菟は道教を固く信じ、仏教を激しく嫌い、遺言によって子の遺菟に法華經の書写を禁じた。しかし遺菟は、国王司馬氏の命令に逆らうことができず、ついに法華經八卷のそれぞれの題号（妙法蓮華經卷第一～妙法蓮華經卷第八）六十四文字だけを書いたところ、夢に父親が現れ、『お前の書いた一文字、一文字がすべて仏となって地獄に現れ、苦悩に陥っている自分を含む皆を救ってくれたのである』と言った」との故事を示されています。これは、子が法華經という最も勝れた教えによって善因をなしたことで、結果として親が成仏するという現証があることを教えています。つまり妙法には、三世に亘る廣大無辺な力用がある、ということです。

間もなく旧盆を迎えますが、亡くなった父母や先祖の追善供養も、妙法にもとづき、寺院でお塔婆を建立し、僧侶と共に読經・唱題申し上げることが大切です。故人達は、この最高無比の供養を、どれほど喜ばれることでしょうか。また、未入信の親に対しては、大聖人が「我を生める父母等には未だ死せざる已前に此の大善を進らせん」（願仏未來記・御書六七九）と仰せられているように、一日も早く入信させてあげることが、真の孝養となることを忘れてはなりません。

○広宣流布を目指した信心

拝読の御文に「此の經を持つ人は百人は百人ながら、千人は千人ながら、一人もかけず仏に成る」とあります。ところが、世間の人はこのことを知らず、また考えようともせず、謗法の害毒による地獄の苦悩にただ喘いでいる、というのが本当の姿です。ですから正法を知る私達が、大聖人の「法華經独り成仏の法なりと音(こえ)も惜しまずよばはり給ひて云々」（如説修行抄・御書六七三）との仰せを確実に実践することが、まさに急務です。一人ひとりに、南無妙法蓮華經こそが唯一の正法であり、その信仰にこそ大功德が具わることを説くと共に、邪宗邪義を敢然と破折していくことが極めて重要なのです。

したがって私達は、御法主上人猊下の「大聖人様の御遺命である広宣流布を目指した信心でなければ、本当の信心とは言えない」（信行要文八一・二一〇）との御指南を命に刻み、いついかなる時も「広宣流布を目指した信心の重要性」を念頭に置き、令和三年の日蓮大聖人御聖誕八百年の御命題達成に向かって、破邪顕正の折伏に精進してまいりましょう。

○日如上人御指南

法華講員八十万人體勢の構築は、私どもが御宝前に固くお誓い申し上げた大事な目標であります。したがって、すべての支部は、この誓願をなんとしてでも達成すべく、いかなる困難・障害があっても、全力を傾注して必ず達成しなければなりません。そのためには、私ども一人ひとりが地涌の菩薩の眷属としての自覚と確信を持って、いかなる障魔が眼前に立ちほだかろうが、異体同心し、勇気を持って決然として折伏を行じていくことが肝要であります。（大日蓮・令和元年6月号）

□まとめ

大佳節を一年半後に控えた、まさに正念場とも言えるこの時期、日々の戦いはいっそう厳しさを増しているかも知れませんが、だからこそ今の仏道修行が重要であり、また尊いのです。お盆休みなどで、日頃会えない方とも顔を合わせる好機を逃さず、勇気を持って折伏を行じてまいりましょう。また家族には、法統相続と折伏の大事を伝えていきましょう。ともあれ私達は、猛暑をはねのける情熱をもって、唱題と折伏に挑戦していこうではありませんか。